

# 新市町村の横顔

## 北相馬郡 守谷町



吉田町長

交通としては、本町の南東部を南北に常総鉄道が横切つて、この沿線、県道を中心として、住宅が謂集し、市街地を形成している。道路は、水海道市から当町大宇守谷を通つて取手に通ずるもの、また大山新田から、木崎、高野を経て取手に通ずるものが縦走しており、その他多くの里道が、各集落を結んで走っている。最近常総鉄道守谷駅の南2kmに南守谷駅が新設され、この沿線の市街地構成は更に拡大されるであろう。本町もまた取手町や利根町のように、利根、鬼怒両川の水利を受け、県南穀倉地帯の一部を形成している。このことは特に、農家人口が昨年2月の農林業センサスによると農家世帯が1,483、農家人口が8,818人であつて、世帯数では当町全世帯の68%、農家人口では、総人口に対して、77%のウエイトを示していることから裏付けられるであろう。人口では、36年2月1日の動態調査で2,152世帯男5,663人、女5,963人となり、昨年10月1日の国勢調査の2,189世帯、男5,571人、女5,878人からみれば、この4カ月に世帯で37世帯の減少、人口では男が92人の増加、女が85人の増加となつている、これは、当町が、大都市東京都を近くに控え、人口の流入流出が他町村に比して大きく影響しているものと考えられる。

## 2. 産 業

概況で触れたように、農家人口が77%を占めており、県全体の60%をぐつと上回っている、これは当町が本県の穀倉地帯としてのウエイトが非常に大きいことを物語っているが、最近産業構造からの体質改善についても、極めて積極的な政策をとり、町民所得の向上に努力している、即ちその具体的な施策のあらわれとして、一つには、430万円の子算を投じて乗用トラックを購入し、原野の開拓に使用し、また現在大きな動きとしては、工場誘致について述べたい。これは当町のいわゆる吉田構想として、現在の産業の伸展を図り、新しい企業の誘致を積極的に進め、産業構造の改善をはかることは、経済水準の低い後進的な地位から離脱するためには、最も重要なことであり、とくに農業が曲り角に來ているといわれる今日、所得水準向上のためにも急を要する施策である。ここに本町では、企業誘致促進奨励措置を設けて、工場誘致に積極的な努力を重ねて来たが、このたび、株式会社製作用所の誘致に成功した、この会社は、本社が広島県呉市にあり、資本金4,500万円、従業員700名で研

## 1. 概 況

位置は本県の南西端、東径139度59分、北緯35度58分であり、南は利根川の対岸千葉県に接し、西は取手町、北は水海道市、東は小貝川の対岸谷和原村に接する東西8km、南北7.5km、面積35.51kmの概ね台地上の地勢からなつている。鬼怒川が当町の北部大山新田から流入して、斜に横切り西部で利根川に合流し、この両河川流域は、沖積土質からなる肥沃な耕地を形成している。

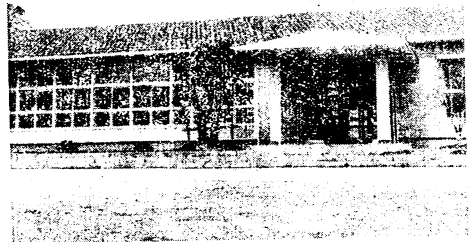
削低石の製造、販売を営業種目とし、販路を関東、東北に伸ばすための基地として当町に敷地20ヘクタールを設置することになった。将来は、海外への販路を開拓すべく積極的な意欲をみせている。当町における工場誘致の成功は、本県の後進性打破の諸政策とも合致し、本県産業構造改善のさきがけとして、その前進は大いに期待されている。

## 3. 教育文化

先ず歴史上の人物としては、平将門に関する伝説が、当地方に伝承されている。将門の無茶な粗暴さと、すぐれた武将としての一面についての数々の伝説があり、その一つを紹介すると、結城市旧山川村新宿にある明王山大尊寺の不動明王は、平将門の守り本尊であつたが、彼の無謀さをさとすため、彼の夢枕に立ち、若しこの説話を無視するならば、守護してやらないと警告を發したことがあるさうで、彼の粗暴な行為が、不思議と庶民の間に人気のあつたことが、彼の人物についての種々の伝説として、今日まで残つている一因であろう。

守谷の浄光院西林寺の住職が徳老と号して、「やれうつな蠅が手をする足をする」で有名な小林一茶と親交があり、一茶がたびたび守谷を訪れ史蹟を残している。

以上は過去の歴史であるが、今日の教育文化として、現在最も当町の重要政策の一つとして統合中学設立の問題がある。これは、中学生徒の激増に対処するためと、昭和37年度から新たに実施される教育課程改定等の問題を考慮し、ここに現存する守谷中学と大井沢中学とを統合し、教育設備の完備された一校の中で、全町中学生徒に均等な教育を行うことは、もつとも望ましいとの結論に達し、統合中学の設立に踏み切つた。当町における統合中学の必要性は、第1には、中学教育は、義務教育の仕上げであり、精神的、肉体的に成長過程にある生徒を恵まれた教育環境の中で十分な教育を行うべきである、従つて統合により、規模の適正化を図り、教育に必要な設備を充実させる、第2には町の融和、発展の基になること、これは合併による旧村対抗意識をなくし、精神的母体としての学校の機能の中で、一体的な意識を醸成し将来の守谷町を担う住民を育成する、第3には、統合による設備充実で、研究意欲、学習意欲が一段と向上されるであろう。このような点から目下鋭意統合中学の設立に邁進している。次代を担うものの育成指導、ひいては町政発展の速大なる構想として堅実なる施策が着々と進展しつつある。



守谷町役場



## 統計の専門化とその利用

丹 藤 一

いざ使おうとすると、中々使える統計はないものだ、といった言葉を時々耳にする。これほどの統計のはん濫にもかかわらず、そうした言葉の聞かれるのは奇妙なことである。

もしそれが本当であれば、統計を製作している者が、重大な誤りを犯していることになり、的外れの努力に汗流している愚をさとらなければならない。しかし、果して使える統計は中々ないものだろうか。

統計を使う立場から、このような、統計に対する不満を抱えている人を大きく分けてみると、二通りあるように思う。その一つは、いわゆる統計の専門家に属する人々の不満である。その不満、というより現在の統計に対する批判の一二をあげるとこうである。

現在の統計は、ほとんどが標本調査(抽出調査)であるが、その調査の場合、標本がどのようにして抽出されたか、その調査対象は果して無作為に選び出されたかどうか、具体的にいつて、どの乱数表によつて抽出が行なわれたかといったことが、今まではあいまいにされてきた。一つの標本調査に対する信頼は、その抽出のしかたの如何にかかっているにもかかわらず、その面における取扱いが比較的厳密ではなかつた。

それに関連して、その調査が標本調査であるからには標準偏差の問題があるが、統計表に標準偏差の記載されているのは少く、特に総合統計書などには殆ど標準偏差が記載されていない。これでは年次別にしろ、地域別にしろ、同種の統計を比較する場合に、正確な比較が不可能である。ある数学者が、「標準偏差を出していない統計は、私らから見れば全然使いものになりません」といつたことがあるが、たしかに、専門家から見た現在の統計はまだまだ完全だとはいえないだろうし、したがつて何等にとつて不満足な統計のあることも、否定できないかも知れない。

「使える統計がないという、もう一つの声は、統計には全くの素人ともいえる、一般の人々から出ている。この人々の統計に対する需要は、きわめて直接的で、末梢的で、悪くいえば身勝手なものが多い。この人々は現代の電子化した社会機構の、たつた一つの部門から、それにまつたりあつた統計が欲しいといつて要求してくる。しかし、そうは問屋が卸さない。自分から統計に手を加えることなく、インスタント食品のように簡単に便をたせ

る統計がないからといつて、それは使える統計がないということにはならない。

最近よく、使える統計、利用できる統計といつたうたい文句で、統計製作者がその決意を新たにしているが、その趣旨はよく分かるにしても、それは決して、統計がダイジェスト化し、その權威の座を譲り渡して地上に下りて来ることではない。

むしろ本当に利用できる統計とは、非常に高度なものであり、利用者の側において、ある程度の統計に対する知識がなければ使いこなせないような統計こそ、秀れた統計として、使える統計の名に値するのではないかと思う。

統計の普及のために、統計表を数多く作ることは大切なことではあるが、一面、統計をいかにうまく利用するか、その為の知識と技術を、統計利用者へうえつけることもまた大切なことである。それは根本的には統計教育の問題に発展するのであるが、少くとも素人では満足な統計の利用は出来ないということを強調する必要がある。

現代では、多くの仕事が専門化しつつあり、統計の仕事もまた同じだといえる。2年前に東京都の統計部長が統計に従事する者の資格を、数理統計の出来る人、語学の出来る人、統計図表の書ける人に限定しようと提案したことがあつた。統計法によれば、統計官及び統計主事以外の者は指定統計調査事務に従事できないとあるのはその意図するところは、東京都の統計部長の提案のように具体化されるものであろう。

もしも官庁に職階制が採用されるならば、統計は当然特殊な技能を要する職種として格付けされる性質のものである。したがつて統計が誰にでも作れ、誰にでも利用できるものでないことを、あらためていつておきたい。現在、進んだ統計機構においては、少数の電子工学者と、経済学者と、数学者と、そして多数の女子事務員(パンチヤーの場合もあるし、自動テープを監視している場合もある)が、統計機械によつて、天文学的な数字を操り複雑な統計をどンドン作り出している。その統計から得られる利益は、終局には、我々にごく身近かな、衣食住に関することであるとしても、統計そのものはどンドン専門化しつつあるを忘れてはならない。